



ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

December 20, 2004, No. 17

【役員名簿(2004-2006)】

代表: 生田省悟(金沢大学)
 副代表: 高橋勤(九州大学)
 顧問: 秋山健、上遠恵子
 事務局長: 結城正美(金沢大学)
 事務局補佐: 茅野佳子(明星大学)
 喜納育江(琉球大学)
 会計: 横田由理(広島大学(非))
 辻和彦(福井大学)
 監事: 西村頼男(阪南大学)
 ニュースレター編集委員:
 小谷一明(県立新潟女子短期大学)
 上岡克己(高知大学)
 山城新(琉球大学)
 会誌編集委員:
 木下卓(愛媛大学)
 高橋昌子(三重大学)
 野田研一(立教大学)
 パトリシア・ライオンズ(愛媛大学)
 山里勝己(琉球大学)
 コンピューターセンター:
 岩政伸治(白百合女子大学)
 北国伸隆(菟光塩学院)
 山城新
 評議員:
 ブルース・アレン(順天堂大学)
 石幡直樹(東北大学)
 伊藤詔子(広島大学)
 小田友弥(山形大学)
 関口敬二(大阪府立大学)
 高田賢一(青山学院大学)
 巽孝之(慶応義塾大学)
 豊里真弓(札幌大学)
 中村邦生(大東文化大学)
 村上清敏(金沢大学)
 吉田美津(松山大学)
 吉崎邦子(福岡女子大学)
 研究助成:
 稲本正(オークヴィレッジ)
 岡島成行(日本環境フォーラム)
 生田省悟(代表)
 高橋勤(副代表)

自らの言葉で語る

--新たなる飛躍のために--

代表 生田省悟 (金沢大学)

生来の気弱さとお人好しが原因で、不本意ながら代表を引き受けてしまった。私のような者がこの重責をまっとうできるのか。こうした弁はいかにも月並みで紋切り型そのものにちがいないとしても、正直な実感である。金沢での総会のおり、一言挨拶をと請われて、「いわゆる三代目の典型というやつで」と思わず口走ってしまったことも、後になってふり返れば、なかば本音、なかば苦笑いといったところだろうか。とにもかくにも、ひとつの大きな節目に相当する 10 周年記念全国大会をつつがなく終えることができた今、ASLE-Japan/文学・環境学会は新たな役員体制のもとで、11 年目という新たな起点に臨もうとしている。

それにしても、10 周年記念全国大会(9 月 4 日~6 日)は意義深いものであったと思う。準備段階や開催期間中の不手際はご容赦いただくとして、研究発表、ラウンドテーブル、講演はもちろん、懇親会や山村文化調査にいたるまで濃密な時間の連続にはかならず、親しく語り合うとの当初の目的は達せられたと確信される。それぞれの詳細については他の方々のご報告に譲ることにするが、実行委員の立場から、会員諸氏のご尽力とご協力に改めて心より感謝の意を表したい。また、私にとって特に印象深かったこととして、初参加だという何人かの会員が「とても自由な雰囲気」と評してくれた事実を付け加えておかなければならない。本当に嬉しいコメントであった。さらには特別企画として会員による書籍等の展示も試みたが、労作の数々、その壮観ぶりをまのあたりにして感銘を受けたのは決して私ひとりだけではなかったにちがいない。それらはネイチャーライティング/環境文学に対する理解の深まりと広がりまぎれもない証しであり、会員ひとりひとりの意欲のありよう、そして学会全体の活動の軌跡をあますところなく物語ってくれていたはずだ。

一口に 10 年とよく言われるが、学会創設をめざす準備期間に費やされた労力はもとより、誕生まもない学会を軌道に乗せるために注がれたエネルギーはいかばかりであったろうか。ネイチャーライティングはおろかアメリカ文学の何たるかをまったく知らず、外野席に等しい位置にいた身からしても、画期的な知の拠点創

造のために情熱を傾け、奔走された野田研一氏やその友人・知人諸氏のご苦勞のほどを強烈に感じ取ることができたものだ。そして、旧来の領域に囚われないどころか境界横断、さらには境界侵犯までいとわないとの決意に喝采を送ったことが鮮明に思い出される。こうした個人の感慨はさておくとしても、ニューズレター16号掲載の「ニューズレターにみるASLE-Japanの軌跡」、『文学と環境』10周年記念号で高橋勤氏が手際よくまとめられた「ASLE-Japan 10年のあゆみ」あるいは野田氏と山里勝己氏との対談などからは、10年間という営為の歴史、年月の蓄積がもつ重みと同時に新たな可能性に対する示唆がひしひしと伝わってくる。これまでのあゆみをどのように継承し、発展させてゆくのかという問いかけに答えることは、私たちのそれぞれが進んでいくなすべき楽しい課題にほかならない。

ここで、私個人のささやかな願望をいくつか思いつくままに述べておくとすれば、まず日本の環境文学研究を定位させたいということがある。日本そしてアジアからの研究発信とは、創成期の当初から見定められていた目標のひとつであった。これは、学会が総力をあげて取り組んだ『たのしく読めるネイチャーライティング』、大会での研究発表やシンポジウム、さらには沖縄国際シンポジウムとその報告集『自然と文学のダイアログ』などを通じて着実な成果を収めつつあるといえるが、それでもなお、この領域には私たちが掘り起こしてみたらおもしろいにちがいないテーマやトピックが秘められているはずだ。まさしく、発見のときを待ち受けている宝庫と言ってよい。ちなみに来年6月、ASLE-US大会のうちに、各国ASLEの代表者による会合が予定されている。初の試みとして大いに歓迎したい。その場で何を話し合うのかはいまだ未定だが、たがいの連携を強化するためのネットワーク構想や共同企画構想などの話題が当然予想される。こうした状況をふまえたとき、私たちはいったい何にどのような形で貢献することができるのだろうか。

ASLE-Japanに求められることの一つは、日本とアジアとをなお一

層強く意識しながら研究を推進するという宿題のように思われてならない。そうした方向性を示す手始めとしてまず、これぞと誇れる日本の環境文学アンソロジーを編纂し、英訳出版すること、要するに楽しい仕事をしたいというのがひそかな夢でもある。

夢をいざ現実のものとするためには、無論、それぞれの日常的な努力が不可欠となる。個人の次元での充実をめざすと同時に、自身の研究のありかたを相対化させる試みや他の意見に耳を傾ける機会も欠かせないはずだ。さまざまな分科会の設立も、従来からしばしば話題にのぼっているところである。その点からすれば、伊藤詔子氏らを中心とするエコクリティシズム研究会がみごとな先例として優れた成果をもたらしているし、今年は「METAサークル」なる挑発的な名称をいただく分科会が充足してもいる。さらには、懸案とされて久しい大学院生の研究グループもようやく実現の運びになりそうだとの話さえ聞えてくる。これは喜ばしい限りだが、そのほかにも多くの分野・領域で、興味と関心を共有する会員同士が集い、研究会・分科会活動を展開してゆくことに期待したい。会員相互による研究・情報交換活動の継続こそが、学会全体の水準を高めてゆく着実な途にちがいないのだから。

こうしたこと以外にも全会員の著訳書・論文目録作成などなど、学会として考えたいことがら、取り組みたい課題が次々に浮かんでくる。また、会員の誰もがさまざまな想いやアイデアを抱えていることであろう。それらを提示し合い、検証・評価し合い、批判し合う。あるいは、ときとして主張が激しく衝突するかもしれない。だが大切にしたいのは、こうした状況をあたりまえの創造的行為として受け入れる環境が熟成していることだ。そして、何よりも肝要なのは、借り物ではない自分自身の言葉で率直に語りかける努力。やはり総会の場で口をついて出たことを繰り返せば、私自身、関心領域のひとつである「エコロジー」を勝手気ままに分節してみると「自らの住まう家＝場所」を自らの言葉で「語る」ことになりはしないかと常に心に留めている。稚拙な心情と発想そのものと評されるのは承知の上で言うのだが、借り物の言葉をいくら巧みに操ったところで少しもおもしろくはないし、理解も共感も十分には得られないだろう。自然であれ環境であれ、また文学作品であれ、対象と対峙し、現象を読み解く過程でどのように自らの言葉を見出し、どのように自らの言葉で語ってゆくのかが、ASLE-Japan／文学・環境学会に託す想いとは結局、この一点につきるといえるのが偽らざるところである。

11年目を迎えた今、会員相互の語らいがさらに充実するよう切に願ってやまない。そのための場を保証することこそ、代表にとって最大の責務と考える次第である。■

野田さん、お元気ですか

村上清敏(金沢大学)

拝啓

野田さん、お元気ですか。アメリカでの生活はいかがですか。今日は、10周年記念全国大会の報告をしたくてペンを執りました。大会前日の3日夜、すでに金沢入りしている山里さん、伊藤さん、横田さん、西村さん、木下さん、アレンさん、大神田さんに生田さんと村上が加わり、「鯛組」でまずは手始めに懇親の会を持ちました。ラウンドテーブルの連中も別の場所で打合会をおこなうとのことでした。

大会会場は、対談の折に山里さんと一緒に下見をしていただいた金沢大学サテライトプラザ。どんなに立派な施設かと期待して来られた方もおいでのようで、少々恥ずかしい思いもしましたが、足の便の良さだけは皆さん誉めて下さいました。大会参加者は60名を越えるという大盛況で、創設時のメンバーが一堂に会して、それぞれ、久闊を叙するとともに旧交を温めました。(このうちの、どなたとどなたかは知りませんが、お二人が、翌日、雨の中を能登へのツーリングに出かけられたやにうかがいしました。)会場の受け付けには沖縄国際大会の成果である『文学と自然のダイアログ』と、会誌『文学と環境』10周年記念号が平積みされ、祝賀気分には花を添えていました。



生田さん、結城さんともども裏方の仕事があったため、腰を落ちつけてじっくりと耳を傾けることは叶いませんでしたが、二日間にわたる8名の方々の研究発表はいずれも内容の濃い立派なもので、限られた時間内とはいえ、質疑応答も熱心におこなわれました。西村さん、高橋勤さん、伊藤さん、山里さんの司会もさすがに手慣れたものでした。高田さんの司会による上遠さんの講演には、会員以外に里山自然学校のメンバーも参加され、一段と盛況でした。ビデオを鑑賞した後、「レイチェルの使徒」とでも呼ぶべき、上遠さんならではの心温まる話ぶりに聞き入りました。

懇親会は柿の木畠の「あまつぼ」に席を移しました。あの汚い「あまつぼ」と驚かれるかもしれませんが、近年建て替えをおこない、今では「割烹」の名に恥じ

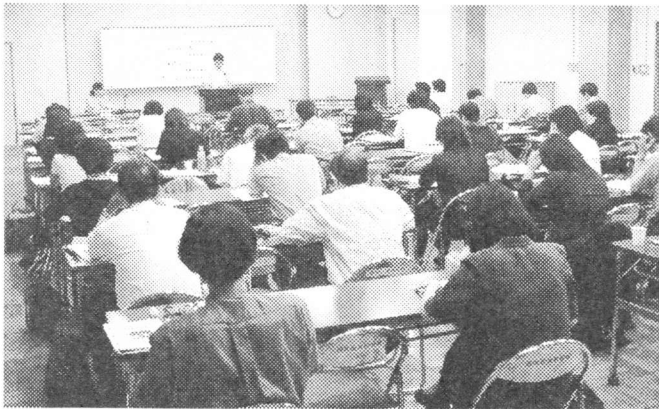
ない店構えとなっています。生田さんとの下見の折、「舌の肥えたご婦人が多数お見えになるので、飲み放題はやめて、品数は少なくともいいから金沢らしい美味しいものを」とお願いしておいたのが良かったのでしょうか、限られた予算にしては、そこそこのものを出してくれたようです。参加者は50名近くにのぼり、サテライトプラザに居た人数よりも多いのではないかとの声も聞かれました。こちらとしては、嬉しいかぎりでした。山里代表の挨拶、高田副代表の乾杯の音頭に始まり、上遠さんのスピーチの後、初めて会に参加された方々に自己紹介をかねてスピーチをお願いしたところ、その数は8名にもおよび、会の今後を考えるとこれまた嬉しいことでした。大会準備に奔走された生田副代表の中締めの後、皆さんなかなか席を立とうとならないほどの盛り上がりようでした。二次会は「ペーパームーン」。念のために「もつきりや」にも一部は分散するかもしれないからとお願いしておいたのですが、こちらの方はあてがはずれて10数名の参加にとどまりました。でも、上岡さん、伊藤さん、横田さん、高橋勤さんもお付き合い下さり、話に花が咲きました。さらに余勢を駆

って、山口瞳ご用達の「倫敦酒場」にまで繰り出し、店を出たのは 12 時でした。居残り組は、西村さん以外では、山口さん、北国さん、生田さん、村上でした。

翌日はあいにくのお天気でした。午前の研究発表を終え、急遽用意した弁当 (35 個) を召し上がっていただき、総会も無事に終え、ラウンドテーブルに移りました。この時点での参加者は 50 名近くになっていたと思われます。若い方々が 7 名も居並び、それぞれの立場からエコクリティシズムと対峙し、その可能性を探ろうとする様は壮観そのものでした。こうした方々が今後の会を担って下さるかと思うと、当分の間は会も安泰だとの思いを強くしました。

後かたづけを終え、車に分乗して白峰に移動。フィールドトリップへの参加者は 21 名プラス結城家のお子さん二人という、これまた前例のない(?) 盛況でした。宿泊先の「望岳苑」は「鄙にはまれな」の差別表現がぴったりの、それはそれは贅沢な施設で、地元の野菜・魚・熊肉まで使った心のこもった夕食といい、桧の内風呂といい、ゆったりとしたベッドといい、今度は別のひとまた来ようなどという感想(願望もしくは妄想)を述べた人までいました。(ぼくではありません。) 入浴後、懇談会に移り、生田さん差し入れの銘酒「越乃寒梅」とぼくが親父からくすねてきたブランデーをなめながら、「望岳苑」支配人である山口一男氏による白峰の歴史と文化、現状についてのレクチャーを受けました。山口氏はコップに注いだ「越乃寒梅」には見向きもせず、息継ぎすらせずに、延々 30 分以上にわたってお話なさり、一堂、その話の内容の深さ、豊かさに聞きほれてしまいました。(山口氏はその後も散会となる 12 時までお付き合い下さり、その間、入れ代わり立ち替わり質問をぶつける会員を相手に、ほとんど喋り続けました。本当に有り難いことでした。)

最終日は、その山口氏の案内で、林道を分け入り、日本一大きな枳を表敬訪問した後、民俗資料館を訪れました。観光ずれしていないぶん展示内容も豊かで、予定時間を大幅に超過しての見学となりました。この後、牛首紬の館を訪れ、



残念ながら帰りの時間が差し迫っている方々もおいでのことから、ここで一応の解散となりました。解散の後にも時間にゆとりのあるグループとともに白峰の町に入り、「北野食料品店」で「堅豆腐」や「枳もち」のお土産を買い、ここでまた二組に分かれ、残ったグループは、近くの食堂でビールを飲み蕎麦をたぐりながら、「総湯」が開く 2 時まで時間を潰し、最後は温泉に浸かって今回の 10 周年記念大会にピリオドを打ちました。ピリオド打ちに参加されたのは、西村さん以外では、乳井さん、石幡さん、高橋勤さん、小谷さん、高橋綾子さん、村上でした。生田さん、結城さんは、金沢駅および小松空港への見送りの任にあた

って下さいました。

以上、飲み会の話ばかりだったじゃないかと叱られそうですが、研究発表やラウンドテーブルの詳細については、別の方がお知らせ下さる手はずのことですので、どうぞそちらにご期待下さい。今回の大会、唯一の心残りと言え、野田さんとご一緒できなかったことです。この便りで少しでも大会に参加した気分を味わっていただければ、これに過ぎる喜びはありません。なお、大会の開催に合わせるようにして、台風 18 号が日本を襲いました。台風の進行があと一日ずれていれば、沖縄・九州あるいは北海道への空の便が完全に断たれるところでした。これは、新代表の悪運の強さを何よりも雄弁に物語っていると言えるでしょう。

それでは、アメリカでの生活が実り多いものであることをお祈りして、ペンをおかせていただきます。どうぞお元気でお過ごし下さい。敬具

2004 年 9 月 9 日

追伸 ここではお名前を挙げる事ができなかった多くの方々のお力添えがあつて、何とか無事に大会を終えることができました。大会準備委員一同、皆様のご協力に篤く感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

上遠恵子先生ご講演報告 演題：「科学と文学のあいだ」

河野千絵

研究発表の時間に続いて、上遠先生が演台に立たれると、会場には和やかで晴れやかな空気が広がった。教室一帯をくると見渡され、にこやかに、「ちょっとプレッシャーでドキドキしています」とおっしゃった後、「イントロとして」と先生はお話を始められた。「レイチェル・カーソンからクイズです。ヘビは脱皮をしますね。その脱皮した後の皮の、眼のところには鱗があるでしょうか？それとも、穴があいているのでしょうか？」先生の柔らかいお声が、続いて「皆さま、どちらだと思われますか、手を挙げてみてください」と、会場に響いた時、私はまるで小学生のようにどぎまぎしながら、直感で、鱗のある方に手を挙げた。(当たっていて良かった。)その場では何となくそれで過ぎてしまったけれど、改めてこの時間の一部始終を思い出すと、このイントロの意味の深さに気づく。

幼少時のレイチェルは、「脱皮したヘビの皮の、眼のところには穴があいているのかしら、鱗がついているのかしら、それと、全体の皮は裏返しになるのかしら」という疑問を胸に、わくわくしながら野原で2時間も、じっとヘビの脱皮を観察する女の子だったという。今回の演題である「科学と文学のあいだ」におそらく欠かせないセンス・オブ・ワンダーと、その「センス」によって触発された疑問を自分の眼で見て確かめる、という科学的な心が、レイチェルには豊かに備わっていたことを物語る、この大切なエピソード。

お話の本題に入る前に、「まずは、レイチェル・カーソンがどんな人だったのか、実際の動いている彼女の映像がございまして、どうぞご覧下さい」ということで、30分のビデオが上映される。これはテレビ朝日が2000年に放映した、「100人の20世紀」というシリーズの中の一編で、『沈黙の春』が書かれたいきさつ、それが世に出たことでカーソンが受けた誹謗中傷と圧力、そして彼女とこの書物の正しさを認めたケネディ大統領(の諮問機関)についてのドキュメンタリーであった。モノクロの映像の中のカーソン女史は、知的で風格のある、それでいて慎ましやかな風情の女性で、討論会の場で彼女は簡潔に堂々と、『沈黙の春』の執筆・出版に至った決意を述べていた。

続く先生のお話は、レイチェルの学生時代からの伝記的な事柄を軸に、文学を志していた彼女が理学部に転部して生物学を学ぶようになった経緯と、その後どのように「科学と文学が合流した」作品を書く作家になっていったか、そして一躍彼女をベストセラー作家にした『海の三部作』にまつわるエピソード、魂のこもった『沈黙の春』と珠玉の『センス・オブ・ワンダー』、それぞれの作品にこめられた彼女のメッセージを、改めて先生ご自身の言葉で伝えて下さった。特に私にとって印象深かったのは、「科学的な正確さ」と「センス・オブ・ワンダー、もしくは生命への畏怖」が、カーソンの信念を支える両輪であったこと、そして、たとえば『沈黙の春』は、「経済の言葉ではなく、生命の言葉で書かれているから今も読み継がれている」というご指摘であった。更にカーソンが、執筆活動を行う際には「(科学的な専門用語等の)言葉の意味は解ることができても、その言葉を使うことがない人を対象にしている」と語っていたということも、いかに彼女が、書かずにはいられない責任感のもとに、読んでもらわねばならないという使命感を持って仕事に取り組んでいたかを伝えてくれるエピソードであった。

科学と文学をどのように表現するか、というテーマを持ち続けていたレイチェル・カーソンが、きちんと自分自身の眼で観察を行って執筆をしていたことを実感なされた、という、映画『センス・オブ・ワンダー』のメイン州のロケのお話も、興味深かった。上遠先生たちはカーソンのコテージに滞在してロケをされたのだが、そこに近い海岸には、カーソンの著作に出てくる夜光虫やホンダワラなどがいて、彼女が書いた世界そのままであった、ということである。



先生のお話は、「センス・オブ・ワンダー」とは、社会の動きにも目を向けていること、すなわち、文明のあり方や進んでゆく先について気をつける感受性をも意味するのではないか、という現代に生きる我々への問いかけ、そして、『沈黙の春』の中でカーソンが書いている「別の道(the other road)」を歩く勇気を持ちたいと思う、という言葉で結ばれた。科学者の眼と詩人の心を持っていたカーソンの遺した人類への普遍的なメッセージが、上遠先生の言葉の器を借りて再び届けられたような、貴重な時間であった。■

10周年記念全国大会研究報告

横田 由理(広島大学(非))



9月4日、5日の両日にわたって行われた研究発表は、十周年目の記念大会にふさわしい多様性に富んだ充実したものとなった。第一発表者の中島賢介氏の「中村草田男『日本人の自然愛』の視座」では、草田男が随筆『日本人の自然愛』の中で述べた「日本人は真の意味での自然愛をもたない民族ではないか」という疑問が「自覚的自然愛」へと発展していった経緯が考察された。伝統俳句と新興俳句を比較する中で、前者は自然へ逃避、埋没し、後者は自然を観念的に把握し自然から逃避しているとし、自然と対峙する人間のあり方を考察する中で、草田男が自然と向き合っていた芭蕉こそ「自覚的自然愛」の先駆者だったと指摘し、一人の人間として自然や社会にどのように対峙すべきかを追及していったことが説明された。次の田中恒寿氏の「ニューカレドニア文学におけるアイデンティティの探求と自然—ジャン・マリオッティ『アンセルテヌ号に乗って』(1942年)を中心に」では、あまり知られていないニューカレドニアという土地の地理と歴史、文学について概説された後、作家ジャン・マリオッティの生涯が語られ、その代表作『アンセルテヌ号に乗って』における「デラシネ(根無し草)」という言葉に象徴されるアイデンティティ追求のテーマが、ココナツなどの自然表象を解説する中で、ニューカレドニアの土地と自然との関係の中で考察

された。次に、多田満氏が国立環境研究所所員としての自然科学者の視点から、多様なデータを駆使しながら環境問題を論じた「R. Carson, *Silent Spring* と有吉佐和子『複合汚染』にみられる化学物質の生態影響—環境研究の観点から」は、文学研究者が大多数の当学会において異色で貴重な発表となった。両作品における化学物質の生態学的影響が概説された他、バイオモニタリングの実践報告など環境問題是正への動きも報告された。次の宮本二三子氏の「生と死の舞台—*Desert Solitaire* を読む」では、砂漠という土地の過酷さが食物連鎖という概念の導入によって、死が生へと還元され、「生命のあふれる場所」ともなること、又、激しい生と死のドラマを展開している砂漠が、開発という人間による破壊行為のため「人工的な死」の舞台ともなっていることが指摘され、多様な死を提示することで砂漠の現状を再認識することの意味が提示された。

5日の研究発表は、辻和彦氏の「“Landor’s Cottage”への道—Edgar Allan Poe とユリノキ幻想」で始まったが、小冊子のような装丁の見事なハンドアウトの美しい tulip tree の絵や写真がまず目を捉えた。発表は後のラウンドテーブルの発題にも連動するエコクリティシズムの方法論を追求する試みの一端であり、Poe 作品における自然表象、Poe と自然との関係が tulip tree (ユリノキ幻想)を中心に読み解かれた。次の「探検家たちのソロー—女性読者論への視座」では、佐藤光重氏が Krutch 編の *Great American Nature Writing* に収められた女性探検家 Laura Lee Davidson をはじめとする女性ネイチャーライターを取り上げ、Mary Austin 他女性ネイチャーライターの作品と照合する中で、ソロー作品に対する19世紀当時の女性読者の視座が考察された。又、これらの女性作家たちが *Walden* の持つ実践性に影響を受け、自然観察者として記録を残したことが指摘された。高橋綾子氏の「ゲイリー・スナイダーの「山の精」—アニミズム的側面の追求」では、スナイダーの『終わりなき山河』の中の「山の精」は謡曲『山姥』が翻訳されたものであるという解釈の下に、スナイダーのアニミズム的感覚を形成している地霊、場所の感覚、パ

一パフォーマンスといったキーワードを中心に、情念の世界から野生へと展開していくスナイダーの統合されたアニミスティックな世界が論じられた。研究発表の最後は、Daniel Bratton 氏がスライドで自らが訪れた諏訪之瀬でバンヤンアシュラムの今日の姿を紹介しながら、1960年代後半から70年代にかけて草の根環境運動の一環として建設され今日の衰退に至ったバンヤンアシュラムの歴史を振り返り、島の自然を背景に環境的視点からの考察で締めくくられた。

2日間で8人の研究発表という盛りだくさんの内容であっ

たが、それぞれの発表が興味深く充実したものであっただけに、懇親会での金沢郷土料理のようにご馳走をたらふく食べたような満足感があった。カーソン、アビーはじめお馴染みの作家たちについての新しい視点による発表には継承されつつ流動していく批評的エネルギーが感じられたし、新しい多様な作家に関する批評やエコクリティシズムの実践には新しい力を実感でき、十年目の節目を迎えた ASLE-J の研究活動の未来への展望が垣間見えたような印象を持った。■

10周年大会報告「ラウンドテーブル」

石幡直樹(東北大学)



ラウンドテーブルは、プログラム2日目午後の総会終了後、2時間にわたって行われた。タイトルは「エコクリティシズム再考—ecocriticism = ecological literary criticism?」である。発題者は7名という多人数で、それぞれの方がエコクリティシズム最前線の状況について

熱のこもった報告をされた。以下筆者の誤解もあるかも知れないが、その概要をお伝えする。

最初に「イントロダクション——エコクリティシズムの混沌」と題して結城正美氏がラウンドテーブルの意図を説明し、この批評様式の現状について、その方法と定義の必然的多様性を指摘して概括した。たとえばスコット・スロヴィック氏は文学批評そのものの概念を打ち破るような、伝統的な文学研究の範疇には収まりきらない定義を与えている。ラウンドテーブルのタイトルが投げかける問いはこの点に由来するのだろう。また、野田研一氏の「エゴとエコの絶えざる葛藤のプロセスこそエコクリティシズムの問題域」という認識もあらためて言及されてその重要性が再確認された。

続いて豊里真弓氏は「多文化主義とエコクリティシズム」において、米山リサによる多文化主義の分類を紹介し、多文化主義の目標は差異を語ることで抑圧・搾取の構造を明らかにし、個人や集団を規定する(因習的)文化に挑戦することであると規定した。そして、多文化テクストを読み解く際のエコクリティシズム(そしてまた文学全般)の役割は、代替りの(alternative)視点を提供して、新たな主体と文化を生み出すことにあるという明快な結論を導いた。

また、茅野佳子氏の「『エコクリティシズム』と『環境文学』の関係——そのダイナミズムを定義する試み」は、批評と作品の両者が相互交流(cross-fertilization)しつつ展開するという予想を斬新な例を取り上げて提示した。ネイチャーライティング、フィクション、散文、詩、小説、エッセイ、歴史物語といった従来のジャンルには収まらない作品の出現。「反パストラル」では説明できないアフリカ系アメリカ人文学の伝統。環境文学としてのミステリー。科学テーマをポエティックに描いた「環境文学」などを紹介して、作品と批評の関係のダイナミックな展開を予感させてくれた。

批評の実践という観点からは、「ナラティブスカラーシップとエコクリティシズム——これからの可能性へ——」と題して山城新氏がひとつの可能性を提示した。誕生後10年の歩みを概観した上で氏の再定義する「ナラティブスカラーシッ

プ」とは、(ナラティブを通して)隠されてきた事象や構造に注意を払わせ、自らの実践を通して排除されてきた声をよみがえらせ、新たな言説の潜在的可能性を示すことである。そして、ナラティブ様式そのものが目的化されることなく、派生する諸問題を受け入れる用意が必要とする。アカデミズム論文の unreadable という悪弊を廃して米国西部で提言された新しい学術言説様式が、日本にも根付くかどうか興味深いところである。

喜納育江氏の「エコフェミニズム文学批評」は、「自然・女性」対「文化・男性」という従来の二元論を問い直す根本的な意識転換が求められていると、エコフェミニズムの現状を分析した。女性の自意識は男性よりも他者との相関性を持ち、責任や配慮という倫理に優るといふ主張などが、そのようなフェミニズムの内部からの体質改善のためには有効であると論じ、(エコ)フェミニズムのさらなる進／深化を確信させる展望を示した。

また都市問題については「都市とパストラル——パストラル概念の再考と〈環境の感覚〉」と題して小谷一明氏がポスト・パストラルの展望を論じた。田舎が都市の延長になった今、アンチ・パストラル(都市論)は不可能となり、田舎の喪失の記憶さえ喪失して言語の痕跡にだけ理想郷を見るポスト・パストラルが現れてきた。それは人工物の廃墟さえ取り込んだ風景であり、生きている場所をありのままに環境として捉える、環境正義や sense of environment を喚起するという刺激に満ちた内容であった。

最後に岩政伸治氏の「西田幾多郎の「場所」にみるエコクリティシズムの可能性」は、西田哲学の論理展開の環境批評への応用を試みた。氏は西田の「無の場所」の概念を、「なかったはずの花がある」あるいは「あったはずの花がない」などの現象のおこる場所、すなわち生成と消滅が発生する生態的な場所と捉える。人間の創造行為(ポイエシス)は外界を変ずることであるという西田の言葉は、ハイデッガーのポイエシス論と通ずるものがありそうだが、同時に、米国生まれのエコクリティシズムを日本生まれの哲学を援用して実践することの可能性を感じさせてくれた。

以上、10年前の学会創設時には考えられなかったような充実した2時間であった。作品研究は進み理論は構築され、この批評様式は可能性を求めて多様な領域へと拡散しながら進化を遂げつつある。7人の若手の研究者によるこのラウンドテーブルがそのことを実感させてくれた。横田由理氏の「開かれたトポスの重要性を体現したラウンドテーブル」という発言は、フロアを代表する感慨であったと言えよう。■

保存と継承について——山村文化調査について

乳井 昌史(エッセイスト、東京農大客員教授)

都ぶりと鄙ぶりと。加賀百万石の城下町・金沢の市中にある会場で研究発表や講演などを終えた今大会は、続いて白山の山ふところにある白峰山にフィールドを求めて山村文化調査を行ったので、対照的な両様のたたずまいをかいま見ることができた。

学会の会場となった金沢大学サテライトプラザの隣に、ひっそりとした感じで金沢市指定文化財「旧園邸 松向庵」があったのに気づいた会員もいるのではないか。茶道に通じた建築主の好みで、住宅ながら各部屋とも茶事に使える閑寂な空間になっている。大正七年建築の近代和風住宅。金沢ではとりたてて古い建物ではないだろうが、

一住宅の端正で風雅な造りは、やはりこの土地柄だから生まれたものだろう。茶会や花展がない時には見学に無料で開放しており、そのさりげなさに歴史的な文化都市の余裕を感じた。

武家屋敷の界隈を歩いていたら、一角にある重厚な構えの門に「金沢職人大学校 長町研修塾」の看板が掲げてあった。「ここだったのか」と思ったのは、金沢に来る直前に読んだ本で存在を知ったばかりだったからだ。地元で家業を継いで四代目の大工さんが、古民家の保存、再生・リサイクルもできる棟梁になるため、三十歳過ぎてから職人大学校に入り、数寄屋建築や宮大工の仕事の基礎

を学び、修了後も文化財保存の勉強を目指すという。しかし、年代ものの屋敷を手入れた学びの場が、由緒ある街並みの真ん中にあるとは。さすがに、ここでは手の技の継承にも力を入れていると感心させられたのである。

さて、金沢から車で白峰村に向かう。手取り川流域のダムにさしかかったが、台風の後だというのに水がなく、むき出しにされた褐色の地肌の続く風景は、長大な蛇がのたうっているようだった。着工当時、石川県政史上最大の公共工事といわれた多目的ダムは、どの程度機能しているのだろうか。

曇りがちで霧も出てくる天気には白山の姿が望めるかどうか気になったが、村営の宿泊施設「望岳苑」のベランダに立つと、いつきだが晴れ間が広がり、夕映えのたおやかな姿を見せてくれた。古くから信仰の対象で全国に三千余の白山神社があるというから、合併で三千の大台を切った市町村の数より多い。改めて、白山信仰の広がりを感じる。

「日本百名山」の深田久弥は、朝な夕なに白山を眺める大聖寺町(現加賀市)に生まれた。白山はもちろん、この名著の中にも含まれるが、著者のふるさとの山として、百名山の中でも殊に注目を浴びようになる。戦後の失意の時代、郷里に引っ込んだ岳人である文士の姿を、高校生だった高田宏がしばしば目にしている。「私は深田久弥の『山』を継いでいる」(『木に会う』)と言う高田さんの、自然誌の分野における創作活動を見ると、風土が人に与える影響に思いがいたる。

「望岳苑」に話は戻るが、天井の高い堅ろうな感じの施設内にあるダイニングでの夕食は、いいものであった。名物の堅豆腐やイモ類、身欠きニシンのコブ巻、イワナの刺し身と塩焼き、木の実や山菜の漬物、それに熊の肉も食べた気がするが、酔うほどに忘れてしまった。山村の食生活の知恵を思わせる内容であったが、これだけの料理は、かつては晴れの日のお膳であっただろう。

ご馳走もそうだが、支配人の山口一男氏の博覧強記ぶりには感じ入った。厳しい自然環境に育まれた民俗、伝説、食物、産業、そしてダム建設で集落が消えるまでの経過……村の遺産を伝える「石川県立白山山ろく民俗資料館」の館長も兼ねているそうで、何をお聞きしても打てば響くように答えが返ってくる。生まれ育った村への愛情と行動力に裏打ちされた知見——生き字引の存在のようだ。

肝心のフィールドワークは、日ごろの不節制がたたって途中参加したので、本稿を書くのに適当ではないのだが、国・県指定文化財である庄屋や製糸業、製材所などを営んだ旧家の建物を配置した広がり、衣食住のすべてにかかわる膨大な民俗資料の集積には目を見張る思いがした。独特の手作り農業によって築かれた、自給自足の文化圏の片鱗にも触れることができた。ただ、あくまでも資料館であって、博物館ではない。県職員がいればいいというものではないが、県立の施設でありながらそういう姿は見かけず、この種の文化活動に欠かせない学芸員のようなスタッフもいないようだ。ダムの「代償」に資料館を造ったものの、今となっては県の運営にあまり気合が感じられず、献身的な館長の八面六臂の活動に頼っているような気がする。

ある地域の伝統なり、文化なり、技術なりをいい形で保存し継承しようとする場合、都市部に比べ、過疎地では一段と困難を伴う。来春実施予定の広範な市町村合併が、どう作用するのか、気になるところである。■

第15回エコクリティシズム研究会報告

2004年8月7日(土) 広島大学東千田キャンパス403であった。

- 1) 全体討議(10時—12時40分)—— *The ISLE Reader: Eco-criticism 1993-2003* (Georgia UP, 2003) 各論を参加者全員がハンドアウトにより内容を説明し議論した。(司会 吉田美津)午後13時30分より18時まで以下の3つのシンポジウムがあった。
- 2) 『怒りの葡萄』と *Dust Bowl*——司会・中島美智子、末中篤、横山純子、真野剛
- 3) ネイチャーライティング古典、Susan F. Cooper, *The Rural Hours* について——司会・横田由理、城戸光世、水野、吉田美津
- 4) ユートピア小説 Ernest Callenbach, *Ecotopia* (Bantam Book, 1975)を読む——司会・伊藤詔子、塩田弘、熊本早苗、大島由起子

(以下次ページへ続く)

(前ページから続き)

来年度日程2005年8月12日(金)の予定。参加のお問い合わせ先

なお研究会では「エコクリティシズム研究会会報」を創刊する。おせ先:伊藤詔子shokoi@hiroshima-u.ac.jp まで。

立教大学公開講演会「環境と文学のあいだ2」報告

山本洋平(立教大学・院)

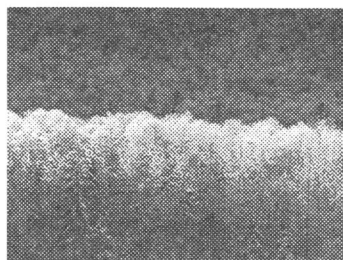
6月5日、立教大学にて講演会「環境と文学のあいだ2」が開かれた。昨年に次ぐ第二弾の副題は「自然はどこにあるのか?」。内山節氏、坪井秀人氏、加藤幸子氏の三氏による自然に関する考察を伺った。

内山氏は哲学者の立場から、「多層的精神のかたち」と題して、日本人の自然観について思索された。日本人は自然にたいして、生存の基盤として感謝しながらも、命を脅かすものとして恐怖も感じている。そうした二面的な自然に日本人はどう向き合ってきたのか。そこで氏は、急流の被害をやり過ごす「流れ橋」のような生活から学んだ「技」を用いて、自然と「折り合い」をつけてきた、と述べる。自然と「折り合い」をつける、あるいはつけない、という伝統的な日本の自然観は、知識や言語、論理を基盤とする合理主義的な「思想」と、言語化されない記憶や、職人的な身体認識力による「技」や「作法」との二側面が不分明なままで併存している。この指摘は刺激的である。この考えは、氏が展望されていたように、一元的な価値観や絶対的な真理を他者に強制する「一層的」精神への辛辣な批判として、国際社会の文脈で捉えなおすことができるだろう。

坪井氏は近代日本文学研究の立場から「風景とポエジー—宮沢賢治・知里幸恵・立原道造」と題して、風景のなかに異形なるものを見いだしていく自然観について考察された。志賀重昂『日本風景論』から柳田国男の民俗学、和辻哲郎『風土』にいたる近代日本の風景観を概観し、国民国家や時局性の問題を包含するという問題提起がなされたあと、賢治の各作品にしばしば登場する山人や土蜘蛛などの存在が指摘された。例えば『山男の四月』の山男は、異常に声が高く、喋ることをためらう壊れやすく弱い存在として描かれている。山人や土蜘蛛などに加えて、賢治世界には風神や犬神、土神などが登場する。また、知里幸恵の作品においても多様な神々の存在が指摘された。

加藤幸子氏は、作家の立場から「私の中に蘇る『アイヌ神謡集』」と題して、知里幸恵の作品との出会いについて語られた。氏が偶然と因果の狭間で出会った『アイヌ神謡集』は、アイヌ語で書かれた口承文学を幸恵が編訳したものである。氏は作品のなかにアイヌ人の自然にたいする感性を見だし、狐や蛙から見た世界をとおして人間と動物の対等な関係が描かれているのに惹かれていく。氏にとって『アイヌ神謡集』は、アイヌ人の作品というだけでなく、知里幸恵自身の繊細で独特の感性によって育まれた作品である。講演では直接には触れられなかったものの、氏の最新刊『池辺の棲家』にも、身近で生き生きとした自然にたいする豊かな感性が引き継がれている。

「自然はどこにあるのか?」という副題は、ソローの言葉「私たちはどこにいるのか? 私たちはだれなのか?」を思い出させる。今回の講演会を契機に、自分のまわりに自然があるかどうか、あらためて問い直してみたい。■



オーストラリアで国際ネイチャーライター会議開催

野田研一(立教大学)

2002 年秋、一通の電子メールが舞い込みました。オーストラリアからのそのメールは、1 年後に開催されるネイチャーライティングに関する国際会議に石牟礼道子氏を招待したいので、その仲介の労をとってくれないかとの依頼でした。残念ながら、石牟礼氏ご自身はご多用とのことで辞退されましたが、一転してならばあなたが来ないかという話に変わりました。

この会議にはスコット・スロヴィック氏をはじめ、作家リチャード・ネルソン氏、テリー・テンペスト・ウィリアムス氏、バリー・ロペス氏など錚々たる顔ぶれが招聘される予定であると聞き、一も二もなく招請に応じることにしました。(最終段階では、ウィリアムス氏、ロペス氏の参加は取り消しになりましたが。)

というわけで、2003 年 10 月 7 日～11 日の 5 日間、オーストラリアで開催された「ウォーターマーク国際ネイチャーライター会議」(WATERMARK INTERNATIONAL NATURE WRITERS' MUSTER)に参加するため、東京からシドニーに飛び、シドニーでローカルな小さな飛行機に乗り換えて、ニューブランズウィック州ローリートンの小さな空港に降り立ちました。

この会議(作家会議と呼ぶのが適切でしょう)は、これを第 1 回目として以降隔年で開催されるもので、オーストラリアを初めとして、ニュージーランド、アメリカ合衆国、イギリス、そして日本からの招聘作家・詩人、合計 28 人が、毎日、朝から夜まで、朗読やシンポジウムを展開するものです。私は 3 日目の“Reading the Environment, Writing the Landscape”と“Laying Down the Lore: What Role Literature”という二つのセッションで日本におけるネイチャーライティング研究の状況ならびに現代日本のネイチャーライターの一例として藤原新也『東京漂流』について話をしました。

こんなふうに期間中、作家たちは代わるがわる最低 2 回は朗読や問題提起のために壇上に上がることになります。会場には出番のない作家たちやオーストラリアあるいはニュージーランドの研究者、学生、ジャーナリストなどが席を占めています。セッションを分割することなく同一会場で朝から晩まで連続するので、次第にお互いが顔見知りになり、会場はいつのまにかアットホームな雰囲気になっていました。同時にオーストラリアでもネイチャーライティングへの関心に火が点いたことを実感しました。作家たちも先住民作家を含めじつに多彩でした。

また、特筆すべきこととして、4 日目の午後 7 時から中華料理をつまみながら、オーストラリアとニュージーランド合同の ASLE 設立のための準備会議が開催されたことが挙げられます。ASLE 設立にかかわった経験者として、スコット・スロヴィック氏と私も招かれ、設立の経緯などについて話をすることになりました。主に若手の研究者が参加したこの会議で、ASLE-AUZ(オーストラリアとニュージーランド)の設立がほぼ合意され、設立に向けた実務的な手順まで議論されました。この会議の運営に当たっていた Mark Tredinnick 氏によるネイチャーライティング・アンソロジー、*A Place on Earth: An Anthology of Nature Writing from North America and Australia* (University of Nebraska Press, 2004)も刊行されて、オーストラリアのネイチャーライティングに対する関心は否応なく高まっているようです。

『内なる島』の作家リチャード・ネルソン氏にはインタビューを兼ねた雑談をさせてもらいました。いまは、作家活動よりもラジオの自然観察番組の制作が愉しくて仕方がないと語るネルソン氏は、そのさりげない、肩の力の抜けた人柄が人気の的でした。ラジオということは、映像によらず耳だけで、あるいは言葉だけで自然を伝えるということで、この新しい挑戦に燃えているネルソン氏のネイチャーライティングが今後どのように展開するか興味深いところでもあります。

このウォーターマーク会議は、オーストラリアを代表するネイチャーライター、エリック・ロールス氏がホスト役として、場所を変えることなく隔年開催するもので、次回は来年 2005 年。招聘作家の目玉はテリー・テンペスト・ウィリアムス氏とその夫ブルック・ウィリアムス氏です。ロールス氏の作品については、スコット・スロヴィック氏がその論文「X のなめらかな表皮をめくると一環境文学のトポスとしての地域性と遠隔性」(野田、結城編『越境するトポス—環境文学論序説』、彩流社、

2004年、所収)のなかで、「自然をめぐる現代オーストラリア文学の記念碑的作品」として論及しています。カムデンヘッドという海浜リゾートで、作家たちと海辺を歩き、大きな野生のペリカンが舞い上がり、舞い降りる姿を眺めながら過ごした数日間は忘れがたいものがあります。

なお、ロールズ氏夫妻はこの海辺に、作家たちが一定期間滞在して著作活動を行うことができる施設を整え、「ウォーターマーク文学協会」を設立して、作家の滞在費を支援する基金まで用意しています。おそらく、今後、オーストラリアのネイチャーライティングに関する中心的な発信源がこの場所になることは間違いないものと思われます。詳細な情報は次の二つの URL でご覧になれます。

「ウォーターマーク文学協会」に関するサイト:

http://www.watermarkliterarysociety.asn.au/Muster_2003/watermark_2003.htm

「カムデンヘッド」に関するサイト

<http://www.camdenheadpilotstation.org.au/>

付記:この記事は1年前の情報です。寄稿が遅れたこととお詫びします。

森崎和江さんが新潟を訪れた日

小谷一明(県立新潟女子短期大学)

今年は各地で自然の災害に見舞われました。台風22号の被害について話している間に、23号が襲ってくる。復旧の話が始まる前に地震が起こる、というふうな。私の大学でも10月終わりの地震で学園祭が中止となり、11月2日に予定された森崎和江さん全学講演では、森崎さんはお越し出来るのかという問い合わせを受けました。その危惧は、大変な時だからこそ森崎和江さんの声を是非聞きたいという講演に集まった人たちの本音です。題名は「心を耕す」でした。年月を経た茶の紺のノートカバーに、丁重に書き込まれた講演の原稿が用意されました。ある学生は、講演の前に大学の構内で蝶のようにくるくる舞う森崎さんを目撃しています。その学生は週末に森崎さんの本を買いに行き、「新潟の本屋はどこにも森崎さんの本を置いていない」と不平をもらっていました。

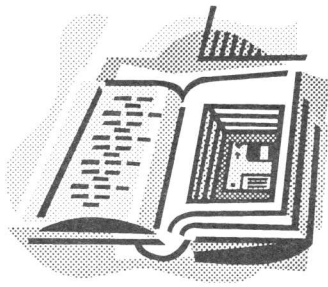
講演でも森崎さんは蝶のように腕をヒラヒラさせ、その舞いととも昔日の歌が流れ出します。定員230名の一番大きな教室でも、椅子が足りず混乱する盛況ぶりでした。そこには幼児教育、生活科学、生活福祉、英文、国際、食物の多様な専攻の学生、教員、そして事務員が集い、文理融合型?の授業となりました。講演の内容は、「故郷」であった朝鮮半島の自然と日本(人)の問い直し、妊娠における「わたし」という一人称への戸惑いと夫婦共同出産、『愛することは待つことよ』で紹介された韓国の福祉施設愛光園との関わり、孫と交わした地球のいのちの話、スピヴァックの近著『ある学問の死 惑星的思考と新しい比較文学』とウィルタ族の録音テープ、そして「老人」というまだ見ぬ未来への期待。発語の柔らかさは教壇を舞台に変え、講演後も幼児教育の教員が『地球の祈り』を授業で使い、学生がそれを借りて読んでいます。『共生とアイデンティティの哲学』で花崎皋平がエコフェミニズムの深化を『いのち、響きあう』など90年代後半からの著作で読み取っていますが、今回の講演も「なぜ産むの/なぜ育てるの、なぜいのちなんぞをはぐくむの」という問われてこなかった問いを、めぐるものでした。この問いかけにより現在も数々の識者が森崎さんの研究を行っています。講演後に信濃川のほとりにあるカフェで、村瀬学著『カップリングの思想』の批評を森崎さんにご教示頂きました。そこでは「大地とのカップリング」という表現で、自然の一部である身体への思考が論じられています。

私のなかでは沖縄での国際シンポジウムで受付をしていたときに、初めてお目にかかったときの感動と興奮がまだ覚めきっていません。『文学と自然のダイアログ』の文章「ありのままの私でありたい。ただその場にいることだけで読みとられるものだから」は、今回の講演でも十二分に実感できるものでした。■

書評

Greg Garrard, *Ecocriticism* (Routledge, 2004)

巴山岳人 (ASLE-J 分科会 META サークル)



本書は様々な批評用語の概念や歴史的変遷の解説を目的とした、ラトレッジ社による「New Critical Idiom」シリーズのうちの1冊である。著者のグレッグ・ガラードはイギリスでのエコクリティシズムにおける重鎮ジョナサン・ベイトの下で学んでいたという。しかしベイトがハイデガーに依拠しながら、「地球に住まうこと(dwelling)」について思考する方法としての「エコ詩学(ecopoetics)」を提唱していたのに対して、ガラード

のエコ批評に対する姿勢は大きく異なっている。

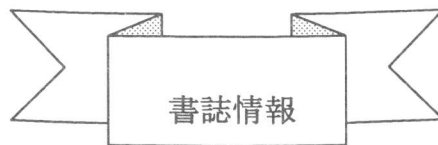
ガラードによるエコ批評の大まかな定義は、様々な言説における自然に関するレトリックの文学・文化的分析、といえる。そこで彼が重視するのは、哲学・政治理論と関連した倫理・政治的な視点である。エコ批評は自然の科学的な分析へ貢献するものではない。むしろそのような科学的言説が文化現象として、いかに社会において機能するかを分析することが、ガラードにとってのエコ批評の主な目的となる。

この彼の主張は、本書内で何度か使用されている「本来性の詩学(poetics of authenticity)」と「責任性の詩学(poetics of responsibility)」の区別を参照すると分かり易い。「本来性の詩学」とは、「不変かつ永続的な基準」としての自然があり、人間の行為はそれに参照されることで評価されるという意識、もしくはその表象である。それに対して「責任性の詩学」とは、われわれが抱く全ての自然像及びそれに基づくと思われる基準もわれわれの想像上の構築物に過ぎず、それゆえ我々の政治的選択を「自然秩序という信用できない客観性や精神的直感という主観による神秘化」でごまかすことなく検証すべきであるとする立場である。

もちろんガラードは後者の立場を支持するのだが、その姿勢は彼の「ポストモダン・エコロジー」への依拠によっている。多くのエコロジー思想及びエコ批評において見られる「調和とバランス」を基盤とした生態系概念は、近年の様々な新しい研究により覆されてきている。そこではむしろ、生態系は「偶発性と不確定性」を特徴とする動的かつ不安定なものであるとみなされている。このような視点からみると、人間と自然との本来の関係を前提とした従来のエコ批評に対する再検証は避けられなくなる。

以上のような前提に立った上で、本書は従来 of 文学研究で論じられてきた自然に関するレトリックの分析を概観した上で、その問題点を指摘する、というスタイルを取っている。具体的には、8つある各章がそれぞれ「パストラル」「ウィルダネス」「動物」というようなトロープを扱い、その歴史的変遷、文化内での機能、そしてそれがはらむ諸問題を論じている。彼自身のレトリックについての考えでは、トロープは広い社会コンテクストと密接に絡み合っており、歴史的推移を通じてトロープはその意味を必然的に変化させていく。それゆえエコ批評はジェンダー、階級、民族といったカテゴリーにおける社会内闘争の視点を通じてトロープを分析する必要がある。そのような意識は、自然表象を文化的に構築されたものとみなす構築主義的思考とエコ批評との関係性への、彼の関心に基づいている。

以上のようにガラードは、政治・文化的批評との相互関連性にエコ批評の新しい方向性を見出そうと試みており、その姿勢は本書において十分に示されている。しかし一方で紙数の都合によるものか、概略を追うあまり説明不足に感じられる箇所も散見される。とはいえこれまでの多岐にわたるエコ批評の流れをわかりやすくまとめつつ、将来的な可能性を明確に提示している点は評価されるべきであろう。体裁は入門書でありながら、同時にエコ批評の現状とこれからの展望を考える上では有用な1冊である。



中村邦生『虚言の領域』(ミネルヴァ書房、2004)

シェイクスピアからナボコフにいたる西洋文学や、日本文学を縦横に切り刻み、文学の魅力を自在に語る評論集。『文学と環境』第5号(2002)に掲載された「水の記憶都市——エピソード的な一事例から」が収められている。(上岡)

日本ソロー学会編『新たな夜明け——「ウォールデン」出版150年記念論集』(金星堂、2004)

『ウォールデン』出版150年を記念して、日本ソロー学会が編集した記念論集。文学・環境学会会員8名からの論考も収められている。(上岡)

野田研一・結城正美編『越境するトポス——環境文学論序説』(彩流社、2004)

文学・環境学会会員とASLE-US会員による13の論考からなる環境文学論集。タイトルが示すように、日本人執筆者は自らの英文学の領域から自在に越境し、日本文学の読み直しを迫る。(上岡)

榎田隆宏『英米文学の鳥たち』(大阪教育図書、2004)

鳥に恋した大学教授が、自らの専門である英米文学に表れた鳥を解説する。鳥と文学の関係を扱った貴重な書。(上岡)

Souder, William. *Under a Wild Sky: John James Audubon and the Making of the Birds of America*. New York: North Point Press, 2004. オーデュボンが54歳の時に書き上げた *The Birds of America* はアメリカの全ての鳥を分類し記録するという彼の野望に満ちた大作であった。本著作は芸術家でありネイチャーライターであったオーデュボンについての、初めてと言っている人物伝。最近この時代の人物たちについての著作が立て続けに出版されているが、その文壇の状況もアメリカ建国精神の一つの表現ではないかと考えてみるのも一興か。(山城)

Carroll, Joseph. *Literary Darwinism: Evolution, Human Nature, and Literature*. New York: Routledge, 2004.

キャロルの文学的ダーウィニズムのアプローチは既に *Evolution and Literary Theory* (U of Missouri P, 1995) で知られているところだが、今回の著作は今までの発表論文をまとめた入門書といった体裁になっている。キャロルによって確立された感のある文学的ダーウィニズムのアプローチとエコクリティシズムの接点は多く、実際にこの本の中でも何度か言及されている。大学生・院生にも使いやすい研究書であろう。(山城)

Nichols, Peter. *Evolution's Captain: The Dark Fate of the Man Who Sailed Charles Darwin Around the World*. New York: HarperCollins, 2003.

ダーウィニズムに関する社会学的再評価、そして文学的アプローチとしての利用などが近年更に盛んになっているが、これは研究書というよりはネイチャーライティングとしても読める本。ビーグル号の船長としてダーウィンに付き添った Robert FitzRoy とはいかなる人物か、そして彼が自殺へと追いやられた航海とは、そしてその動機は……。ダーウィニズムに関心がある方にはお勧めの作品。(山城)

【寄贈図書】(ASLE-Japan に寄贈していただいた書籍です。事務局でお預かりしています。)

➤ Kayano, Yoshiko. *Peter Taylor's South: Crossing Boundaries in a "Tennessee Caravan"*. Tokyo: Hitsuzi

Shobo Publishing, 2004.

- 乳井昌史『スローで行こう--「自然環境」を考える 44 冊』NHK 出版, 2003.
- 『接続』3(特集--越境する都市), ひつじ書房, 2003.

研究発表募集

2005 年度文学・環境学会が 10 月 16 日(日)、17 日(月)札幌大学において開催することが決定しました。つきまして、研究発表を募集致します。発表希望者は 800 字程度のレジュメを 2005 年 4 月 30 日までに、下記の住所宛御送付下さい。(応募者多数の場合は、レジュメの査読により発表者を決定致します)

810-8650

福岡市中央区六本松 4-2-1

九州大学言語文化研究院

高橋 勤

tsutomu@flc.kyushu-u.ac.jp

◆学会のご案内◆

<レイチェル・カーソン日本協会総会>

日時: 2005 年 4 月 16 日(土)午後 1 時より 5 時まで

場所: 高知市立自由民権記念館

シンポジウム: 「レイチェル・カーソン 高知からの発信」

深瀬尚子「レイチェルの会の歩み」

上久保由佳「センス・オブ・ワンダーと私」

上岡克己「環境文学入門」

浅井千晶「カーソンと海の詩人たち」

講演: 上遠恵子「レイチェル・カーソンの世界へ」

事務局より

◆ビデオ貸し出しのお知らせ

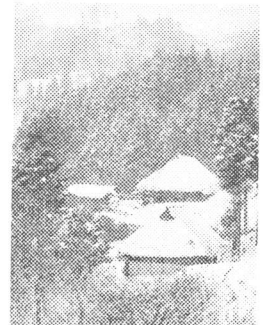
『センス・オブ・ワンダー レイチェル・カーソンの贈りもの』の貸出をはじめました(期限は 2 週間、送料は負担していただきます)。希望者は事務局・結城(E-mail: yuki@ge.kanazawa-u.ac.jp, Tel: 076-264-5819)までご連絡ください。

◆『文学と環境』第 8 号投稿先に関する訂正

『文学と環境』第 7 号に記載されている会誌編集委員長の電子メールアドレスに誤りがありました。正しくは、木下卓 <tkino4ta@ll.ehime-u.ac.jp>です。

◆ウェブサイトが新しくなりました！

ASLE-Japanのウェブサイトを全面的に更新しました。<http://www.asle-japan.org/> をご覧ください。



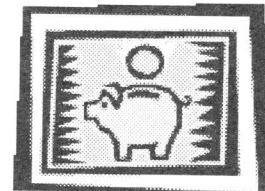
《会費納入のお願い》

ASLE-Japan の運営はすべて会費で賄われています。昨年度会費未納の方は早急にご納入ください。

郵便振替

口座番号:01380-1-56784

加入者名:ASLE-Japan(文学・環境学会)



【編集後記】

ニューズレター編集委員会は結城さんの後任に小谷さんを迎え、新たな体制で取り組んだ最初の号です。ずいぶんと盛りだくさんになりましたが、文学・環境学会の盛況の証でもあります。編集委員会では原稿を随時募集しています。編集委員までお寄せください。では来年も会員の皆様にとってよき一年でありますようお祈り致します。(2004 年師走 K)

【発行】

ASLE-Japan/文学環境学会

事務局：金沢大学法学部

生田省吾研究室内

〒920-1192 石川県金沢市角間町

TEL/Fax: 076-243-5826

E-mail: <shogo@kenroku.kanazawa-u.ac.jp>

【編集】

編集代表 上岡克己

〒780-8520 高知市曙町 2-5-1

高知大学人文学部

TEL: 088-844-8197

FAX: 088-844-8249

E-mail:kamioka@cc.kochi-u.ac.jp

